主題	職員が主体となって施設内研修委員会を運営することで得られた意識の変化		
副題	職員が参加したい研修を目指して		
人材育成		施設内研修委員会の取組み	
研究期間	15月	事業所	特別養護老人ホーム 第2サンシャインビル
発表者	大谷 真澄（おおたに ますみ）		アドバイザー：
共同研究者：下田政勝 島田正晃 井上守之 福島由美 室賀こずえ 施設内研修委員会			
電話	042-553-3701	メール	sasaki@fukuyokai.or.jp
FAX	042-553-3715	URL	http://www.fukuyokai.or.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成8年3月、ヨコタ基地と七夕祭りで有名な福生市に開設しました。特養利用者154名で平均介護度が4.2となっています。理事長・統括施設長の掲げる「人がその人らしく生活できる環境作り」をモットーに、利用者の皆さんが日々明るく笑顔で生活できるような支援を、職員全員で継続しています。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

当施設では、平成19年から施設内研修委員会を設置し、毎月1回施設内研修会を開催していました。しかし、これまでの施設内研修会は、指導検査基準などに目を向けて年間の予定や研修内容を定めていた事や、講師を務めていたのが、生活相談員などの役職者であったことなどから、堅苦しい印象が先行していたという反省をもとに、本来施設内研修は何のためにあるのかという原点に立ち返り、「利用者ケアのために」「職員のスキルアップのために」ということを主に研修の内容を考えていくこととしました。

具体的な取り組み内容（課題）として、

- ① 研修内容の再考
 - ② 職員が講師を担当できないか
 - ③ 全職員に研修内容を周知する方法
- の3点に取り組むこととしました。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

職員が主体となって研修内容を考えることで、今現在フロアで直面している問題点を浮き彫りにすることができる。またその問題を解決するためにどんな研修が必要かを考える力がつく。

講師を担当することで、自分の業務に対しての理解度を振り返ることができ、必然的に足りない部分の勉強を重ねることでスキルアップにつながる。又、スキルアップする事により利用者ケアの更なる向上が期待できる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①職員が主体となつての委員会運営

- 新体制での委員会運営
- 研修に対しての職員アンケート
- 職員への講師依頼
- 手作りポスターを利用しての周知
- 色々なパターンの研修方法を導入
- 外部研修に参加後、興味深い研修方法を施設内研修会で再現。
- 講師役の職員が、独自に研修方法を考え実践。
- 研修時間や開催回数の変更

②感染症予防研修にて（参加型）

- 手洗い評価キットを使用して、正しい手洗い手技を身に付けているか確認する参加型の研修は大変好評で、厨房職員を中心に、感染症の流行時期に再度同様の研修を実施するなど、意欲的な声が挙がった。

③外部に向けた研修会の開催

- 外部講師を招いての研修を、職員が講師との打ち合わせ・日程調整・周知活動等の準備段階から関わり運営に携わる。
- 地域に向けて情報発信を行い、研修への参加を求める。

④施設内研修発表会（ミニアクティブ）

- 年度末に、各フロアで取り組んだケアの中から、これと思う内容を研究発表形式で発表。

2階「認知症であっても自分らしく生きる」

3階「利用者と深く関わることで意欲を引き出すケア」

4階「自立支援～味噌汁づくりで見せた素敵な笑顔～」

《4. 取り組みの結果と考察》

ケアと研修を結びつけて考えることができるようになったことで、施設全体の研修だけでなく、フロア・部署単位での研修も開催されるようになった。

職員の声だけでなく、利用者やご家族の声から研修を開催し、より良いケアにつなげていこうとする意識の変化が見られた。

委員会での話し合いの際、各委員から積極的に意見が交わされるようになり、自分たちで考えて委員会運営を行えている。

《5. まとめ、結論》

講師を担当した職員は、業務知識の確認と同時に、他部署との連携を深める貴重な経験となっていて、確実にスキルアップにつながっている。また年度末の研究発表では、他のフロアの取り組みや抱えている課題を共有することで、フロア間の交流や職員の意識向上につながっている。これらの成果を現場での OJT につなげることで、結果として、施設全体の利用者ケアの向上に役立てている。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

該当なし

《7. 参考文献》

該当なし

《8. 提案と発信》

人材育成という観点から、研修を通して、自分たちの仕事を見つめなおし、自分たちの手で改善し、より良いケアを利用者に提供していくという形が出来上がりつつあります。

このことは、職員個人の成長と同時に、施設全体の成長にもつながっているように感じます。

【メモ欄】